

344
山岸澤吉五郎

寛政十年九月森田屋に三代目九藏(後三代武佐)の上調子を始めて勤む事
年表)文化元年八月中村屋に始りて三味線接とせり(出)

345
山岸澤盧舟

文化二年十一月河原崎屋に三代目古式部の上調子

346
三代目

山岸澤武佐

初三代目九藏 後三代目右和佐 後又九藏

享永三年生立 二代目武佐の弟子 天明七年八月桐屋に始りて上調子に去勤(半)
寛政三年春河原崎屋(道徳深山)横山十八才一と才太夫の多て三味線を
勤め、その後七年二月桐屋には三代目兼太夫の多てを勤む 寛政七年師
二代目武佐改名して二代目古式部となりて今 寛政十二年十一月中村屋興行に
三代目武佐を相統として綱太夫(後の三代目兼太夫)の多てを勤めたり 其後
如何なる事情にや文化二年四月河原崎屋に綱太夫の多てを勤りて限りて
師より破りせられ数寄屋藤八と名乗りて富本の三味線を弾きし文化
六年五月十二日その母の懇願として三代目富本豊則太夫の口添之に漸く
歸参りて其九藏の旧名に後して二代目古式部の上調子三代目兼太夫(もとの
綱太夫)の多てを勤め文化十二年十一月河原崎屋にて三代目山岸澤右和佐を
改めし文化六年十一月又々常磐岩津を破りせられたり(出) 此は山岸澤宗家
相統の子にても義兄弟の文蔵武佐の實子仲助と争ひ敗れりて憤嘆の
あまり絶食して自殺せりと伝えらるる。

三代目武佐は破りせられし名を剥奪せり故にや月峯翁の山岸澤系譜には
その名を加えず 二代目古式部を四代とし四代目文蔵武佐後の三代目古式部を
五代目とせり

三代目 岸澤 安治

文化元年八月、中村屋に始末を上調子格に記載(常)文化四年五月中村屋に初代文藏(後に四代目式佐)の上調子と彈き文化八年六月、中村屋に曰三代目前太夫のタテ三味線と勤めたり。後、文藏、三吉式部、三吉九藏等、いつて皆士勤せり。この人は又政末年、天保改改名したるべく、天保四年、代目式佐伴仲助より代目式佐となり、名弘の留習合の時より代目式佐の上調子と勤めたり。安治はふとらく別人なり。

四代目 岸澤 式佐

初鳥羽屋万助 府川文藏

(安永元一政也)

安永元年、芝浜松田に生じ、初め、府川文藏と名乗る花房東村と共に五毒園太夫のタテ三味線となり、寛政工年四月より同丁二年中出勤せし。園太夫改後、二代目古式部の和子となり、岸澤文藏と改め文化三年正月には河原崎屋に朝比奈とて伊勢太夫のタテ三味線と勤め、同四年、中村屋、淡島、網太夫のタテを勤め同年十一月、四代目式佐と稱名市村屋に出勤あり。其の後は三代目前太夫、小文字太夫のタテ三味線と、古式部、九藏(一町三吉式佐より一人)等と勤めたり。五吉式佐(後に古式部)は府の定子なり。

① 斎藤月取の字本「岸澤系譜」による

四代目式佐(安永二年一政也)実名を文藏と云い、本現世河原崎屋茶屋、中村屋文治初の子なり。文政三年、五吉招本幸四郎、五吉岩井幸四郎等、一属して京阪地方(巡業)に入り、文政五年、実子式佐と名古屋に至り、同五月、二一三の同地に於て怖政せり。享年五十七、高瀬川町首題等に葬す。

② 弘化元年五月、岸澤式佐定にて三吉式佐三三回忌追善上より「年向の花あやめ」を詠う。同年表にあり。その三吉式佐と云うもの、徳とすべし三十二年、安永文政五年にあり。常磐社には、但馬初屋万助寛政工年二月、前太夫等と共に破竹、その後享和二年十一月、常磐社に歸り、翌三年十一月、万助改の文藏とあり。百の記録あり。

③ 老の戯言にとも。

尚文化十二年吉原細見の岸澤式佐の名あり
△「新鶴屋辰少翁の雨の鉢の本名作由

□ 岸澤条藏 349

文化四年十一月沙原崎屋四代目式佐の上桐子と娘ゆくとその陪雨三回出勤あり

□ 岸澤鯉鮒助 350

文化八年三月市村屋に三吾吉式部曲四代目式佐の上桐子

□ 三代目 岸澤三三初 351

初代三三初は曲三三初より多しを降りし人なり

文化八年三月市村屋に三吾吉式部曲四代目式佐の上桐子と娘ゆと文政八年正月
中村屋は四代目小又字太夫の多しを味縁を勤りたり。文化丁二年林吉原細見
に三三初の名あり。吉原の男共名あり

□ 岸澤市三初 352

文政四年頃より上桐子格とて出勤あり。文政六年三月森田屋に娘ゆと三三初格と
あり

□ 岸澤分藏 353

文化六年六月森田屋に四代目式佐の上桐子と娘ゆと出勤あり

354

岸澤松蔵

後故澤松蔵

文化八年六月市村屋に二代目安治の上調子。その後九年九月森田屋に四代目
武佐の上調子。以後も上調子として出勤ありしが文政四年八月申村屋に
四代目小文字大夫のりてを始り勤めしより案ずるに三味線格と
なりしなり。而して上調子は一立部なり。八月市村屋に同じくりて勤めし後
遣酒大夫・豊名賀王再興の時りて三味線となり文政十年一月河原崎
屋に出勤あり

355

三代目岸澤文蔵

後可龍

四代目武佐の弟子。始り芝居に出勤せり文化十二年上月中旬村屋に武佐の上調子
正勤あり時なり。文化元年三月森田屋に始り三味線格となり(常)
其の後も同格にほしく出勤あり。文政の初年可龍と改む(文政丁軍
九月市村屋に始り四代目小文字大夫のりて三味線を弾く)冠中

356

岸澤古吉

文化十二年十一月市村屋に武佐の上調子として出勤

357

岸澤佐吉

文化十二年十一月河原崎屋に四代目武佐の上調子